# 七月総評　立花開

本当はもっと
悲しいことがあるはずだと
フードコートで泣いた

土居　尚子　東京都

今の自分の感情をないがしろにして、何度も何度もないがしろにして、何が本当か見えなくなってしまった。見えない、というのは自分も他者も見えないのだ。たくさんの人が溢れかえるフードコートで涙を止められないほどの悲しさなのに、まだ否定してしまう。

祝福はすべてやさしいリサイクル

雲理そら　大阪府

考え出してはいけない領域がある。例えば、自分の感情はどこまで自分オリジナルのものなのか、とか。他者の経験も含め、出来事と感情のデータを元に生きることを私たちは避けられない。祝福こそ誰かの感情をなぞっているだけなのかも。表情や声色などの“表”の部分との温度の差が面白くて恐ろしい。誰もが感じたことのある感情。

ともに桃を剥いたまちの
天気予報消した
雷、雨、霰あれ

青粒　神奈川県

ともに過ごした時間の中で、理由はわからないけれど特に思い出深く残る些細な出来事がある。二人で桃を剥いた時間が、主体の中では濃く、そして明るい記憶なのだろう。今でも共に過ごした街の名前をふと目に入れてしまう。未来を映す天気予報が暗いものでも。

口が図書館になったとき
何度も泣いた

千葉羅点　愛媛県

後戻りはもうできない、ということ。本当はすべてのことがそうなのに、望んでいなかったものを与えられたときの辛さたるや。しかも口が図書館になるなんて、苦そうである。絶対にならないようなものになってしまった、望んでいない苦さ。けれど、それは人生そのもの。

会いたい人の
会いたくはない人として
生きていく、空があかいね

小里京子　北海道

抱えきれなくても、抱えて生きていかなくてはいけないものが増えていく。たとえ憎い相手からでも拒絶は苦しいのに、会いたい人からの拒絶だなんて。誰に話しかけるでもない「空があかいね」はその事実から目を反らすための苦し紛れのクッション。崩れた韻律とa音の繰り返しに不安定な中のバランスが見える。

ねむの花酔えば楷書になる声の

大西　美優　広島県

お酒を飲んだあとは声の輪郭が柔らかくなる。声も言葉も前後が繋がって、さながら楷書のようだった。見えないものを誰もが見たことのある文字として表現する巧みさを感じる。初句「ねむの花」のふわふわとした花の様子から始まる一句は、夢の中で歩いているかのようだ。

その一節が
私にとっては聖書だった

広崎石紗　広島県

自分の心にのみ沁み入る言葉がそれぞれにある。けれど程度の差によって軽いお守りだったり、心の中の神のような存在にもなる。自身の信仰への向き合い方によって深度は変わるのだ。聖書と言い切る一点の曇りもない様子は、救いにも自分を破滅に追い込む危うさにも見える。

きみもまたここからのいのちせみ
のあな

田崎森太　東京都

誰もが、「ここ」と言われた場所から命は始まりを繰り返す。点であり、線であり、繰り返しである。その尊さ・光の部分ではなく、「せみのあな」という暗がりが突然クローズアップされて、何者かの取り決めに抗えないような恐ろしさを感じてしまう。「ここ」と言ったのは誰なのか。

## 妹の足跡だけに繁る羊歯

塩見　佯　沖縄県

選ばれたのか囚われたのか。年齢は分からないが、自分より小さいと認識している妹の足跡に羊歯の葉が群がる。意志の淡い本当の植物ではなくて、なにか違うものが混ぜ込まれた、肉厚で、脂っこく、においの強い羊歯。命はもともと全てがそうであるのに。

## ラの音で笑う踵をうんと上げ

木下　香苗　滋賀県

笑い声がいい音程だと、より楽しさが伝わる。しかも、踵を上げてしまえるほどの開放的な心を持って、大きな口で・大きな動作で笑う。絶対音感を持っているであろう主体には、明るい音楽として耳に入ってくるのだ。「うんと」に目いっぱい詰め込まれた陽のエネルギーが溢れる。